

弾正忠家の台所

細野 哲弘 (株) JECC 代表取締役社長
(元 特許庁長官 元資源エネルギー庁長官)

織田信長が戦国の覇者であり、その成功が経済政策を含む革新的先見性に立脚していたことは間違いないであろう。楽市楽座しかり、安土城の意匠しかり。

でも、群雄割拠の戦国絵図の中から忽然と現れ、あれよアレヨという間に京に旗印を立てることができたのは何故だったのであろうか。もともと守護職の被官でしかなかった織田家の分家出の「うつけもの」が、今川の大軍にまさに蹂躪されんとした桶狭間を、奇襲作戦で乗り切ったあと「トントン拍子」に運を開いていけたのはどうしてであったろうか。

「尾張、三河、美濃は京都に近かった。交通の要路でもあり、山の彼方^{かなた}にあって遠い甲斐や雪に閉ざされた越後、北陸路などの有力梟雄^{きょうゆう}に比べ『地の利』があった¹⁾」というのは事実であろう。しかし、それだけならば、畿内や伊勢、東海の他の戦国大名にもチャンスがあったはず。なぜ、信長であったのか。

我々は歴史の「結果」を知っているから、「後知恵の誤謬^{ごびゅう}」とでも云うべきであろうか、結果と整合的な勝手な類推をして一連の因果関係を判じる（色眼鏡で見る）弊がある。

曰く、信長は「もともと旧弊を打ち破る独創的な発想の持ち主でその経済政策は他の追随を許さぬものであった」、「鉄砲の運用を始め装備・軍制の改革などを先取りして時代をリードした」などなど。でも、そうだろうか。仮にそうだとすると、どうして彼にはそれができたのだろうか？ そもそもブロックにも見える桶狭間で一回くらい勝ったからと言って、それでもって「あとは破竹の勢いで……」というのは、ちょっと解釈が安易過ぎるのではなかろうか。もともとこの地域の兵が屈強だとは聞いたことがないし、ある程度肥沃^{ひよく}であり豊かでないとはしないが、穀倉というほどの土地柄でもなく、もともとの領地



桶狭間古戦場



桶狭間古戦場

1) 信長にとって、比叡山、一向宗の門徒との戦いや頻繁に服従・離反を繰り返す畿内の大名らの扱いも面倒ではあったろうが、ライバル武将として畏怖していたのは武田信玄と上杉謙信であろう。国境を接する二人の相互の牽制・痛み分けは信長にとって幸いした。しかし、仮に信玄が信玄が壮図の途上で病に倒れなければ歴史は分らなかった。謙信にとっては、信玄の存在は目の上のたんこぶであったが、それよりも越後が雪深い穀倉地帯であったことも上洛の妨げになった。冬に動けず、刈り入れ時期にはある程度の配慮が必要であった。

もちっぽけである。彼はどう遣り繰りして「伸していった」のだろうか。

やはり何か伏線があるはず。流行の「プラタモリ」風に言えば、「ちょっと秘密を探ってみましょう」というのが今回のテーマ。

信長が旧弊を改めて新機軸を打ち出した典型として挙げられるのが、楽市楽座である。もともと「楽市」と「楽座」は別物であり、前者は市場の課税を免除すること。後者は「座」という独占的、排他的な取引制度・主体を否定して、だれにでも自由に取引をさせること。いずれも経済活動を活性化させるという意味では政策整合的であり、一緒に論じられる。座や取引税、関税というのは、これを運用する中世的権力(公家、土豪、寺社など)には意味があっても、経済の発展の支障になるし、「改革者」としては打倒すべき対象であった。しかし、信長治政下でその実例は意外に少ない。加納(岐阜)、安土のほかは所謂自治都市くらいであり、自治都市はそれ以前から事実上の「楽市楽座」である。ほかでは、信長はむしろ既往の座を「安堵する」という形で追認²⁾して、楽座にしていなかったのである。また、公家

や寺社が勝手に通行税(関税)を取っていた関所の廃止も信長の功績の一つに数えられるが、それも尾張、美濃及びその近辺だけにとどまっている。

意外に是々非々である。形に拘り押しなべて一律にやるというのではない。是々非々というのは融通性があるということ。実際に、自らの支配の容易に及ぶところはそれなりにではあるが、畿内や北陸、瀬戸内海³⁾など将軍や皇室の威光が残る処(例えば、皇室領の京都の七口関)や「既存勢力」の強いところでは無理はしていない。或いは特権を奪って自前で替わりのシステムを用意するよりは既往の仕組みに乗っかる方が良いという判断をしているようにも見える。これは柔軟性と現実性の表れであるが、これは目指す分野が貨幣経済、流通経済であったことにも関係があろう。

秀吉以降には、これら残された地域の「特権」も剥がされていく訳であり、この時期の信長の対応を「妥協」と捉えるか、「柔軟性」と捉えるかは微妙ではあるが、貨幣経済・商業経済に関する彼の感覚がよく出ているのではなかろうか。つまり、それ以前の領主支配というのは、鎌倉時代以降の「一所懸命」的な発想から、米の収穫に着目した農業生産支配を旨としており、新しい貨幣経済の動きにはまだまだ鈍感であった。勿論、当時でも流通はあったのだが、物々交換の延長のものくらいにしか捉えられていなかった。米穀経済の仕切りは、天候や土地の慈味に左右される不安定な耕作の成果である農産物を相手にしている割には、単純である。為政者(お上)の制度運用・適用は画一的であり、取り立て(年貢)は米を以ってし、不作であろうがお構いなしである。それに対し、信長の「生産だけが世すごし(経済)ではない。商売は相手があるのだから状況を見ながら柔軟に対応することでよい。むしろ、全体の実利・便宜をどう転がしていくかが肝要。」という感覚は注目されてよい。その素養・着想はどこから来たのか。彼一代の革新的天才性のゆえであろうか？



楽市楽座表札(岐阜市歴史博物館展示より)

- 2) 信長やその家臣によって「安堵された座」としては、越前の軽物座、紙座、若狭の金屋職、船座、建部の油座、堺の馬座などがある。
- 3) 「海上水運」、「水軍」という分野は信長にとっては苦手(或いは後発分野)であったろう。石山本願寺に手を焼いたのも瀬戸内の水路から支援する毛利とその配下についた村上水軍の軍略に後手を引いたせいである。この海域での関所・徴税は水軍勢の独壇場であった。もっとも、後日漸くにして「鉄甲船(鉄板を張り付けた大型軍船)」を仕立て、村上水軍の度肝(どぎも)を抜いたのは彼らしい。

信長の生い立ちを改めてみてみよう。素養に係る疑問がじんわりと氷解してくる。「茶筌^{ちやせんまげ}で粗衣^{ひょうたん}を荒縄で縛りとめ、火打袋や瓢箪^{ひょうたん}をぶら下げて、馬上で

柿を頬張るうつけもの」とか「父親の葬儀にも、半袴^{はんか}に半中をつっかけ荒縄に脇差を落とし差しにした格好で現れ、抹香^{まっこう}を位牌に投げつけた⁴⁾」というようなエピソードばかりに着目してはいけない。



織田信定の蹟碑（愛知県愛西市勝幡町・「織田弾正忠平朝臣信定古城蹟」とある）

当時、尾張を統^{すべ}なつた守護大名は斯波氏。信長の家系はその下で尾張下四郡^{しもよんぐん}の守護代を務めた織田大和守家の、そのまた分家。清州三奉行の一つとして大和守家の家政を分掌し、代々「弾正忠^{だんじょうのじゅう}」と通称した⁵⁾。

信長の祖父にあたる織田信定は、奉行を務めながら四郡のうち中島部、海西部に徐々に勢力を広げ、津島の地を押えることに成功した。彼は津島からほんの4kmほどの勝幡城^{しょうばんじょう}に本拠を置いた。津島というのは今でこそ内陸に入った町であるが、当時は木曾川の支流である天王川に沿った「津島湊^{つしまみなと}」と呼ばれる港町であり、古くから水運の拠点であった。町と



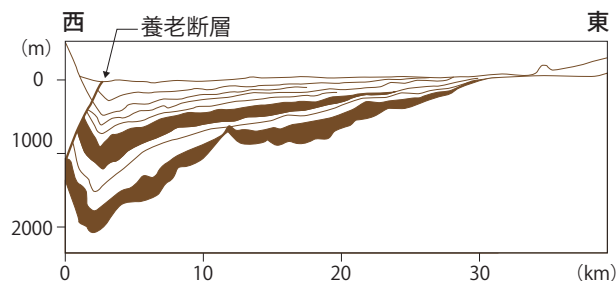
津島湊付近図（現代との比較）

- 4) 信秀が病没したのは1551年。享年42歳。領国こそ一国の支配に終わったが、今川義元とも攻防を重ね戦勝したこともある猛将であり、「尾張の虎」といわれた。かねて跡取りには品行方正な信行（信長の弟）を推す家臣もいたが、信秀は一貫して信長の素質を買った。また信長も父に一定の親近感を抱いていたという。万松寺（ばんしょうじ）での葬儀における奇行も、「うつけ」を装うためだけではなく、心の中で敬愛する父の早すぎる死への信長一流の惜別の仕方であったかもしれない。半中というのは、草履の前半分だけで、踵部分のないもの。走りやすく当時悪童などが普通に履いていた。
- 5) 弾正忠は、令外官で監察・治安維持を担当する「弾正台」の三番目のランクの職名。「歴名士代」に依れば、「織田弾正忠、平信長」とあり、もともと越前の祇官の系譜に源を持ち藤原姓でいたのに、信定の頃から平氏を名乗った信長のことが出ている。彼は1554年頃から何故か「上総介」と称するのだが、自称である。なお、弾正忠の上が次官級の弾正弼（だんじょうひつ）で、大弼と少弼の細分がある。松永久秀が弾正少弼に任命されているほか、上杉謙信と養子の景勝も弾正少弼に叙任されていて、景勝の息子定勝が弾正大弼に叙任されて以後、江戸時代の米沢上杉家当主は代々弾正大弼に叙任されている。



しての歴史は鎌倉時代まで遡ることができ、室町時代末以降は桑名から伊勢路に繋がる交通の要所であった。

濃尾平野は典型的な「断層角盆地」で、100万年近く前から平野の東側が隆起し、西縁の養老断層を中心に沈降する「濃尾傾動地塊運動」により、徐々に沈む平野西側を三本の川の堆積物が埋めるという経過を辿ってきた。まさにその運動のせいで、この地域は物流の繁栄とは裏腹に、木曾川などの氾濫に悩まされる地勢であった。この地が湊としての機能を失うのは、洪水を解決するため築いた「お囲い堤」による。江戸期の尾張藩初代徳川義直の治政下のことである⁶⁾。



濃尾傾動地塊の東西断面図
(「日本の地形5 中部」東大出版会の図より作成)

信定の頃はまさに「湊機能」が隆々と発揮されていた時期であり、紙、木綿、木材、塩、海苔などの産物を扱うこの地方有数の通商都市であった。

この頃、この町は既に誰からの支配も受けない自由都市で、惣を形成し「四家七苗字四姓⁷⁾」と呼ばれる有力者たちによる自治の下にあった。俄かに触手を伸ばしてきた織田家とは、当然のことながら抗争状態となる。

信定は武力行使も辞さず、津島の町家、寺社を焼いたりしているが、もとより町のポテンシャルを潰すのが目的ではなく、結局は自らの主導権を確保しつつ有力者たちと関係を樹立するという形に収めている。抗争は1524年に和睦が成立。「縁組外交」を巧みに駆使し、津島側の筆頭大橋家に嫡男信秀の娘(「くらの方、信長の姉」)を嫁がせることとなった⁸⁾。また、信秀は萱津の実力者土田氏とも誼を通じ、その娘を正妻(土田御前・信長の生母)に迎えている。



津島湊(石碑と常夜灯)



天王川公園

6) 天王川はこの「お囲い堤」により堰き止められて池となり、現在は長閑な天王川公園になっている。なお、養老断層から伊勢湾断層に連なる断層に沿った沈降は今も続いており、同じ平野の中でも東西で微妙な地勢的な綾を作っている。現在熱田神宮のある熱田台地は、その昔盆地の沈降運動に加えて南から伊勢湾の海水が流れ込み「海成層」を形成したところが後に隆起したもの。名古屋台地から「象の鼻」のように南に伸びる高台段丘である。他方、西の木曾川などの河口付近の地域は長年に亘り水害との戦いを強いられた。この地においては、治水はまさに治世の肝であった。その一つである幕府による「宝暦の治水」については、本誌265号「高須輪中の縁」を参照。悪乗り of 叱責を覚悟で「プラタモリ」風に言えば、「坂、段丘、断層が面白い」のである。

なお、本文に掲げた濃尾傾動地塊の断面図を仔細に見ると、九州起源の火山灰の層をいくつも含んでいる。鬼界カルデラの噴火(鹿兒島沖・7300年前)の噴火など、古事記に出てくる幾つかの神話が実は火山活動に関係しており、その痕跡がこんな处にも表れているという面白い話にも連想が繋がるのだが、ここでの論旨を大きく外すので、深入りしない。

7) 「惣」というのは、百姓、町人による平等意識、連帯意識によって結ばれ自治組織のこと。ここ津島で自治の中心になった「四家七苗字四姓」というのは、南朝の宗良親王を主君として北朝幕府と戦った南朝の流れを組む吉野15家のこと。うち「四家」とは、吉野から供奉した武士「新田四家」のことで、大橋、岡本、山川、恒川の各家。「七苗字」とは、供奉公家庶流のことで、堀田、平野、服部、鈴木、真野、光賀、河村の各家。「四姓」とは、その他の実力者のことで、宇佐見、宇都宮、開田、野々村の各家。

8) 大橋家の文書では信秀の娘を娶ったとなっているが、この時信秀はまだ十代の半ば。嫁に出す娘がいるというには若すぎる。むしろ信秀の姉ないし妹ではなかろうか。



津島神社本殿

さらに熱田の豪商加藤家とも関係を深めている。1540年頃には津島一円は織田家の掌握下に入ったとみられる。実態のグリップのありようは定かではないが、「商人の頭割りで一律税を課すよりも、商業活動の拡大によって支配地全体の経済性・付加価値を向上させる方がメリットは大きい」と判断し、彼らの自在の活動を保証し、結果として盛んになった交易量に応じて一定の矢銭（軍資金）を取るという形で支配関係を確立した。また、この地の隆盛には津島神社⁹⁾の存在と参拝客の通行・消費も大きかった。信秀はその神官をも保護している。

要は、「人と物の往来にこそ価値の源泉がある」ことを肌合い感覚で見抜いて、それに合致した対応をしている。当時の全国総石高は1800~2000万石くらいといわれ、勿論その積算基礎は米である。しかし、これにカウントされない分野の意義が急速に高まる時期であり、領主の「真の実力」はこの正式にカウントされない分野への係わり度合いに左右された。のちに信長は、足利義昭を奉じて上洛し、將軍

になった義昭から褒美^{ほうび}として知行を示されたが、むしろ代わりに堺、大津、草津などへの代官の設置を望んでいる¹⁰⁾。

因みに、信定には朝廷との折衝の形跡があり、「皇室御経済史研究」などによると息子信秀は1543年内裏修理の名目で40万疋（4000貫）を献上したとある。信秀は伊勢外宮にも7万疋（700貫）を献金している¹¹⁾。当時周防・長門の大内義隆などが頻繁に献上をしているが、この織田家からの献上額は破格である。当時の経済単位の価値を類推するのは極めて難しいが、40万疋は1万石から1.5万石ほどの値打ちがあると推定される¹²⁾。仮に10万石の大名を考えると、四公六民でかつ公の分を領主と家臣団で半分ずつ取るとしても、領主の実入りは2万石でしかない。そう考えると、1万石余相当の寄付がボンとできるというのは相当な「余裕」である。しかも、「物々交換+α」の経済下で、これを「銭の献上」で行っていることは注目されてよい。すなわち、織



織田信秀像（菩提寺の万松寺パンフレットより）

- 9) 津島神社の祭神は須佐之男命（すさのおのみこと）で、その本地仏である牛頭天王（こずてんのう）を病氣平癒神として祀っている。江戸時代には熱田—桑名の渡しを辿るには津島を経由する必要がある、「伊勢、津島いずれ欠けても方参り」と言われるほど多くの参拝人で賑わった。
- 10) 信長の下で学んだ秀吉も、石高にカウントされない分野に目撃された。その石高は最盛期でも220石ほど。最盛期の信長（700万石）や家康（400万石）に比べても遜色があるように見えるが、彼は堺の通商を押え、全国の金山、銀山を押えていた。
- 11) 金1分が100疋=1貫。疋は皇室関係の寄付の記載などに用いられた。信秀は朝廷への献金で、従五位下・備後守に叙任されており、さらに伊勢神宮の式年遷宮の際の献上により、三河守にも任じられている。大内義隆は献金の回数が多く、筑前守、太宰大貳を経て兵部卿にまで累進している。なお、信秀の死後の三河守には今川義元がなっている。
この時期の戦国大名の一部にとって、官位取得は重要な箔付け威示活動。ただし、「先立つもの」が賄えない向きにはその取得は容易なものではなかった。なお、信長は官位叙任を軽く見て、独自に「天下布武」の印や「第六天魔王」などという呼称を用いた（本誌285号「下天のうちは比らぶれば」参照）。
- 12) 貫銭高と石高、反別との関係は、時代、土地によって様々である。室町時代後期の換算相場では、一貫（一貫目又は一貫文）は2反歩相当であり、石高では甲斐、信濃の例、そして信長の褒美の際の銭高と知行の関係から類推するに、米2.5~4石に相当すると推察される。この換算の大雑把さには問題なしとしないが、この時代に「銭で献上」できる意味は大きく、朝廷への献上リストの常連が海運・貿易などの盛んな地域の大名であったのは故なきことではなかろう。



田家は信長より以前に一頭^{ずぬ}図抜けた財政力を持っていたことになる。

日本の中近世の歴史教育の難点の一つに、合戦、事変、開幕・倒幕など政局中心の展開に重きを置き、経済・社会の地殻変動がどのように政治に影響を及ぼしたかという視点に乏しいことが挙げられる。戦国時代とは室町時代の末期のことであり、風雲逆巻く戦国絵巻が面白くないわけではない。しかし、例えば、足利義満の勘合貿易の結果何が起きたか、物産開発などにより貨幣経済がどの程度浸透したか、「米穀経済+ α 」あるいは「物々交換+ α 」の α がどの程度の重みを持ったか、そしてそれらが幕府や地方の為政・治政にどのような構造的な変化をもたらしたかなどを必ずしも有機的、立体的に描写できていないきらいがある。

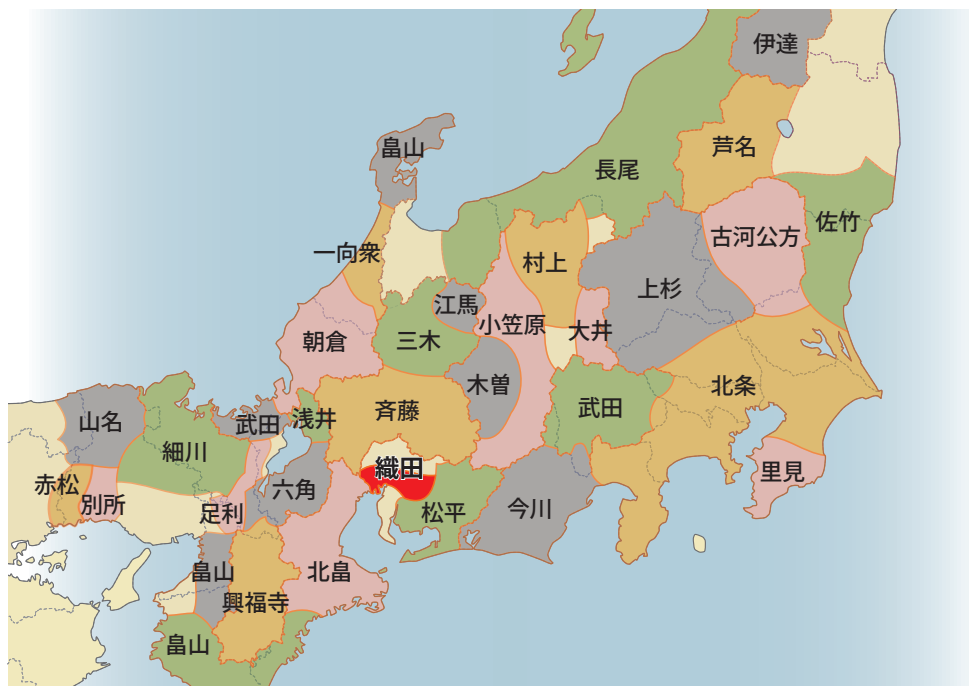
織田家の興隆に即して言えば、織田弾正家は、信長の祖父の時代から、単なる領地支配による米穀経済だけでなく、通商貿易、商業経済の新時代性・潜在力にいち早く着目した。そして、その活性化を支援しつつ、その活動秩序を維持することによる実利

をしっかりと掌握するのに成功して、財を蓄積したのである。信長は祖父、父の治政を目の当たりにして、世の仕組み、処世の基本を学んだはずである。時代の大きな流れに身を置いて、他に先んじる経済感覚を磨いたのであり、こうした基盤に立っていたからこそ、桶狭間あとの「ブレイク」になりえたのである。また、こうした財政力があつたればこそ、のちの兵農分離の常設軍制や鉄砲の大量整備なども可能になるのである。

信長の成功・飛躍は一代にして成らず。信長の成功は、祖父から父を経た三代の先見の明（「革新性」）の上に成り立っていたのである。意外に話題になることが少ないが、信長の^{のぼり}幟は「黄絹に永楽銭、はね題目の招き」で、永楽銭が3枚描かれている¹³⁾。

「補給^{へいたん}・兵站^{じりき}」という域を超えて、組織・体制の^{まかな}地力基盤は賄いにある。「体制の賄い機能の拠点」を「台所」という。江戸時代の「大坂は天下の台所」というが如しである。

その意味で、「津島は織田弾正忠家（或いは信長）の台所」であった。



信秀が津島を勢力下においた1540年頃の勢力図（点線は現在の都府県境で、勢力範囲は大まかに表示）

13) 永楽通宝は中国からの通貨銭として輸入されたもの。徳川時代に寛永通宝が鋳造されるまで、当時の国内通貨として広く流通した。真田の「六文銭」ばかりが有名だが、信長の旗印は「三文銭」である。なお、嫡男信忠の幟も同様な意匠であるが、永楽銭は1枚（一文銭）である。幟に採用したのは、「永楽」という響きが瑞祥であるという含みもあったかもしれない。